

ビルマ

朝日新聞東亜部編

29238
A82
Ⓢ

292. 38-A82ウ
1200500733509



始



行發社聞新日



236

マルビ

編部亞東聞新日朝

20

917
260



朝日時局新輯發刊の趣旨

世界は今や有史以來空前ともいふべき大戦と激動の最中にある。今日の一日一ヶ月は過去の歴史中の十年にも一世紀にも匹敵する變轉を續けてゐる。かうした異常極まりなき時機において最も大切なことは、矢繼早に起きつゝある内外百般の出來事の中で、その主流的な題目につき正確な知識と認識とを持つことである。これを持たずして、この時局とわが日本がどの方向に進展しつゝあるかを知ることは出來ない。

本書は右の趣旨に基き、世局の進展に伴ひ隨時發行される時局新輯とも稱すべきものゝ一つである。その特色は、各題目につき實力ある筆者が、出來るだけ簡明平易に書き、懇切にして權威的な解説書たらんとする所にある。

目次

ビマヘガキ.....一

ビルマ.....

一、土地と住民.....三

二、産業と貿易.....一

三、興亡の歴史.....一八

四、壓制と反抗.....二五

五、ビルマ人のビルマへ.....三二

ビルマ・ルート.....

一、陸商の路.....三九

二、滇緬公路の建設.....四一

三、ビルマ・ルート禁絶まで.....四六

四、ビルマ・ルート再開.....五二

五、ビルマ・ルートの危機.....六一

六、大東亞戦争の勃發.....七二

シンガポールが陥落してのち、敵聯合軍の防衛主力は蘭印とビルマとに向けられてゐたが、老獯なイギリスは、我がジャバ島上陸に先立つて、聯合軍總司令官ウエーヴェルを印度軍司令官に復歸せしめ、ビルマ防衛に全力を傾注するの態勢を示すに至つた。蘭印を怨嗟のうちに見捨て、濠洲を悲嘆のうちに孤立せしめても、なほビルマを守らんとするイギリスの意圖は奈邊にあつたか。それはいふまでもなく、老英帝國がよつてもつて存立する残された最大の寶庫印度を維持せんがためであり、またビルマ・ルートを確保して、重慶の離反を食ひ止めんがためにほかならなかつた。しかしイギリス必死の防衛にもかゝはらず、ビルマ進攻の皇軍は破竹の猛進をつゞけ、三月七日ベグを陥れてビルマ・ルートに遮斷の鐵鉞を下し、翌八日、輝く第三回大詔奉戴日には早くも首都ラングーンを占領した。イギリス多年の壓制によつて色褪せたシユエ・ダゴン・バ

ゴダの尖塔は、同じ佛教徒たる日本の軍隊を迎へて、今こそ灼熱の太陽に燦たる黄色の光を放つてゐる。このときにあたりビルマについて解脱の筆をとり、あはせてビルマ・ルートの敵性の跡を顧みることまた意義深いことであらう。

ビルマ

土地と住民



(地名の讀方は「南支南洋」附録、南方資料館編の「地名集成」による)

位置 ビルマはどこにあるかと問はれた場合、恐らく多くの人は、印度の東にあると答へ、印度支那半島の西北部にあると答へる人は、極めて少いであらう。政治的にも經濟的にも、英領印度と密接な關係にあり、事實また數年前までは、英領印度の一州であつたから、無理からぬことであるが、しかし土地といひ、産業といひ、はたまた住民といひ、地理的諸條件からみれば、ビルマは多分に印度支那的性格を持つてゐて、そこはまさしくタイや佛印とともに印度支那の一部である。それが従來英領印度と併稱され、印度支那から切り離されてゐたのは、イギリスの魔手に、その本然の姿を歪められてゐたからである。最近の中等學校の地理教科書をみると、

ビルマを英領印度支那の項に入れて説いてゐるが、まさにさうあるべきで、かくてこそ大東亞共榮圏の一環たるべきビルマの地位を明かにし得るのである。

それはともかく、ビルマは印度支那半島の西北部を占めるイギリスの直轄植民地で、面積は二十六萬一千六百十平方哩、わが國の總面積よりもやゝ小さい。

地勢

先づ地勢から述べると、世界の屋根といはれるバミール高原から發したヒマラヤ山系が、國の北部で二條にわかれて南下し、東は支那の雲南省およびタイの國境に接する廣大なシヤン高原となり、その末が長くマレー半島に延びてテナセリムの山脈となつてゐるし、西はアラカン山脈となつて印度との自然の境をなし、一旦ベンガル灣に没するが、再び島々となつて浮び上る。これがアンダマン、ニコバルの諸島である。このやうな北、西、東と三方を高い山脈で圍まれた中央に、イラワヂ河が幾多の支流を伴つて流れ、下流に廣大なデルタを形成してゐる。シヤン高原の中に、その延長においてはイラワヂ河にまさるサルウインの大河が流れてゐるが、山間に深い峡谷をなしてゐるため、イラワヂ河ほどの價値を持たない。ある學者は、ビルマはイ

ラワヂの國なりといつたが、實にイラワヂ流域の低地こそ、ビルマの歴史の舞臺であり、今なほこの國の核心をなす重要部分である。

氣候

大部分熱帶圏に屬し、一年が雨季と乾季に分たれる。雨季は五月から十月までで、印度洋から吹きつける季節風が猛烈な雨をもたらす。乾季は十月中旬から翌年五月初旬までで、このうち二月までは比較的涼しく凌ぎやすく、三月から五月、ことに雨季のはじまる前の四月ごろが暑い。雨量は、西南の季節風が直接あたるアラカン山脈やテナセリム山脈の西斜面の沿岸地方が最も多く、年雨量五千ミリに及ぶ。(日本の東京附近は千五百ミリ。) イラワヂのデルタも多いが、山の蔭になつてゐるため、その半量に減じ、さらにマンダレー附近のイラワヂ河中流部になると、ずつと少く五百ミリ程度で、乾燥地帯である。普通イラワヂの下流域とテナセリム海岸地方を含めて下ビルマ、それより北部を上ビルマと呼んでゐるが、大體において上ビルマは乾燥地帯であり、下ビルマは濕潤地帯である。

住民

ちやうど昨年(一九四一年)ビルマでは十年毎に行ふ人口調査があつた。その結

果によると、總人口が一九三一年の時よりも約二百萬増加して、一千六百八十二萬餘である。
この中には種々雑多な人種が含まれてゐるが、先づ最も多數を占めてゐるのは、約一千一百萬、
六割五分にのぼるビルマ人である。これは民族學上チベット・ビルマ族に屬すとされ、西部ヒマ
ラヤ地方から入りこんで、今はイラワヂ河とサルウィン河に挟まれた中央部から南部にかけて分
布し、主として農耕に従事してゐる。十一世紀に創建されたバガン王朝以來、いくたびか王朝の
興亡はあつたが、大體において他種族を凌駕し支配して來た民族で、文化的にも最も進歩して
る。熱心な佛教徒で、彼等の住む至るところに佛塔と僧院がある。佛塔はバゴダと呼び、佛陀へ
の奉仕として建立したものである。僧院は僧侶の住居であると同時に、民衆の初等教育機關でも
ある。従つて僧侶の數も多く、ビルマ全土で約二十萬、ラングーン市だけでも人口の一割は僧侶
であるといはれる。小乗佛教ではあるが、その發祥地セイロン島あたりとちがひ、僧院が民衆に
開放され俗界と深く結びついてゐるため、僧侶の影響力も強く、彼等が常にビルマ民族解放運動
の中心をなしてゐることは特に注目しなければならない。

ビルマ人に次いで多いのは、シャン人で、約百四十萬人、タイ族に屬すといはれ、主にシャン
高原に住んでゐる。こゝには土侯が幾人かゐり、シャン聯邦州といつて、ビルマの他の地域とは
別に、直接ビルマ總督の支配下におかれてゐる。
その他、西部のアラカン山脈地方に住むアラカン人、東南のモールメインのあたりに住むモ
ン・クメール族のタライン人、サルウィン河中流カレニの山地に住むカレン人、イラワヂ上流
雲南省境の山地に住むカチン、西北の山地のチンなどがあり、合せて約二百三十萬。このうち
アラカン、タラインの兩種族は古來ビルマ人と覇を争つたものであるが、今は一隅に逼息して昔
日の佛がない。カレン人はほとんどキリスト教徒になつてゐるほど早くから英人に懐柔され、
そのため僅か百三十萬でありながら、ビルマ人と同等、否むしろそれ以上の權利が與へられて
る。

右の原住民のほか、外來人として多いのは、印度人の百萬と支那人の二十萬で、印度人は西
部から南部にかけて擴がり、ラングーン市の如きは過半が印度人である。商業、金融業者として

ビルマの米を左右し、英國のビルマ搾取の仲立をしてゐるため、ビルマから排斥的となつてゐる。支那人は雲南から入つたものが多く、鑛工業、商業等に從事してゐる。先に入つた印度人の勢力には及ばないが、持ち前の辛抱強さで、漸次ビルマ人の經濟生活に食ひ入り、ためにビルマ人から支那人入國制限が叫ばれたほどである。なほ、支配者たるイギリス人は僅か一萬にすぎない。

次に簡單に交通と都市について誌しておかう。

交通

イラワヂ河を根幹とし、その河口附近は優に一千噸級の船が入り、上流五百哩支那の雲南省に近いバーモまで、二三百噸の汽船が溯る。鐵道はすべて國營で、ラングーンを中心に延長二千哩に及んでゐる。自動車路は主に鐵道に沿つて走り、延長約三千五百哩。航空路としては、ラングーンを基點に、バンコックと昭南島へ、いづれも週二回、カルカッタへは隔日に大型旅客機が飛んでゐた。また一九四〇年には、昆明を経て重慶へ飛ぶ線も開通して空の援蔣ルートとなしてゐた。

都市

首都ラングーンはイラワヂ河口から約三十哩溯つた分流ラングーン河に位し、ビルマ最大の港でもあり、米をはじめ對外貿易の大部分はこゝを経由する。援蔣ルートの起點であり、「印度洋の上海」として、英米が重視してゐたことは周知の通りである。昔は一寒村にすぎなかつたのを、一八五二年イギリス人が建設して今日の繁榮を來した。人口五十萬。市内には高さ三百七十呎金色燦たるシュエ・ダゴン・バゴダをはじめ多くの佛塔が聳え立つてゐる。

ビルマ第二の都市マンダレーは國のちやうど中央、イラワヂ河に沿ひ、人口十八萬。かつては王都として誇つてゐたが、今はたゞ昔を偲ぶ王城、古寺が旅人の眼をひくばかりである。ラングーンからの鐵道が、こゝから北はミチナ、東は滇緬公路の終點ラシオへと延びてゐるが、ラシオへ行く途中四十二哩、海拔二千四百呎の地點にメーミョーといふ避暑地がある。酷熱の時節には政府の要人がこゝへ移る。

ラングーン—マンダレー線の列車で、二時間ばかり行つたところにペグがある。昔タイ人人の王城のあつたところで、郊外に有名な大臥佛像がある。このペグから鐵道は分れ、マルタバン、

モールメインを通つてテナセリム海岸のイエまで延びてゐる。モールメインはサルウィン河の河口の港町で、第一回英緬戦争後一八二二年から四十年間英領ビルマの首都であつたが、今はその繁榮をラングーンに奪はれてゐる。人口約六萬。イエから先の海岸には、錫の産地タポイ、マグイがあり、突端の國境の町はビクトリヤ・ポイントで、この飛行場のある軍事上の要衝は、今次ビルマ作戦の劈頭我が手中に歸した。

次に西方の海岸にアキヤブがある。こゝは天然の良港ではあるが、背後に山岳を負うてゐるため、物産の集るべきものがなく、輸出港としての價値は減じてゐる。バセーン河の河口のバセーンはビルマ第二の港で、デルタを控へた米の集散地として名高く、精米工場が軒を並べてゐる。イラワヂ河岸のフロームも米穀の集散地であるが、こゝからラングーンまで鐵道が通じてをり、河を流れ下つた貨物をこゝで汽車に積みかへて、迅速にラングーンへ送つてゐる。人口三萬餘。

二 産業と貿易

農業

印度支那は、マレー聯合州を除いては、農業が基本産業となつてゐるが、この傾向はビルマにおいて最も著しく、住民の七割以上が農業に従事し、輸出總額の六割までが農産物によつて占められ、これだけで輸入總額をカバーしてゐるほどである。また財政上からみても、農業による土地収入、關稅收入等がこの國における歳入の主要財源となつてゐる。

しかもこの農業を代表するものは米作である。巨大なデルタ、モンズーンによる河川の定期的氾濫、それによつて與へられる肥沃な土壤、そしてまた一年を通ずる高温の持續——これらは米作の理想的條件であるが、ビルマのイラワヂ大三角洲は、最もこの條件を具備してゐる。そこでは米による收穫量が日本の石にして年産約三千萬石にのぼり、支那、印度、日本に次ぐ世界第四の産額を示してゐるが、その約半量は過剩となつて輸出されるので、輸出量においては世界第一

である。

しかし、かゝる莫大な收穫量は、單に自然的條件のみによるものではない。そこにはビルマ人をして米作一本に追ひ込んだイギリスの政策が認められてゐる。イギリスは、一八五二年第二回の英緬戦争でベグ一帯の下ビルマを占領した時からすでにこの地方の開発に努力し、好餌をもつて上ビルマの農民を下ビルマに引きよせた。しかしビルマの農民には開發の資金がない。そこで利用されたのが印度人で、彼等はイギリス人の優遇をうけてビルマに入り、土地を擔保にビルマ農民に金を貸した。その結果、印度人の入り込む前は國內の需要を満たすにすぎなかつた米の産額が飛躍的に増大して、二十年足らずのうちに世界有数の米輸出國になつた。それならば、かうした米の輸出の増加によつて、ビルマの農民の生活が向上したかといふと、全く反對である。米が増産されて輸出されるやうになると、豊凶や輸出先の需要の關係で、米價が常に浮動する。一九二九年を中心とする世界不況時代の如き、米價が大暴落して、ビルマの農民を苦境に陥れた。農民は土地、作物を擔保に印度人から金を借りた。今日その借金は合計五億ルピーに達し、ビル

マ全耕地の半分までは印度人不在地主の手に握られてゐる。これがビルマにおける印度人排斥の主要原因であり、米作に見られるこの搾取こそは、イギリスのビルマ搾取の典型である。

米のほかに、農産物としては、上ビルマの乾燥地帯の豆類、胡麻、落花生、棉花、それにテナセリム海岸の多雨高熱地方におけるゴムなどがあるが、このうち豆類、胡麻、落花生は國內の消費にあてるに止つてゐるためとるに足りないとして、次に棉花とゴムについてのべよう。

棉花の栽培地はタミヨウ、メチラ等を中心に、面積三十五萬英反、年産一萬五千噸を産するが、栽培面積がすでに飽和状態に達してゐるため、シヤン州方面への開拓と栽培技術の改善による増産が考慮されてゐる。輸出額は約一千萬ルピー。その過半は日本向けで、一九三九年（昭和十四年）の日緬通商條約により、ビルマの棉花輸出可能總量の六割が、日本製綿布によつてリンクされてゐるのであるが、すでに廢棄の通告をうけてゐる。

ゴムの成育には、一年を通ずる高温の持續と多量の降雨を必要とする。マレー聯合州の海に面した地帯がかうした條件に恵まれてゐるため、世界一のゴム産地になつたのであるが、ビルマに

おけるゴム産地は、右の條件を持つテナセリム海岸で、マガイがその中心である。産額は年とも増加しつつあるが、マレーの年産三十六萬噸に比べ、僅か一萬噸を超えるにすぎない。ほとんど生ゴムのまゝ海峡植民地に送られ、一九三九―四〇年の輸出額は五百萬ルビーである。

鑛業 その第一は石油で、年産百萬噸、世界總産額の僅か〇・四%にすぎないものであるが、東亞においては、蘭印の二・八%の次に位し、英領としてはトリニダットに次ぐ重要な産地である。

油田地帯は、イラワチ河とその支流チンドウイン河の流域が主で、マグエ地区のエナンジョンとチヨークの二油田だけで、ビルマ全産油量の九割を占めてゐる。

エナンジョンは單一油田で、一八〇〇年に発見され、面積八百エーカー。近年産出量の減退がつゞいてゐるが、なほビルマ第一で、一九三九年の産油量（機械井のみ）は一億六百萬ガロンであつた。産油は約三百哩におよぶパイプによつて、ラングーンに近いシリヤムの精製工場に送られて處理されてゐる。

チヨークは、シング、その他大小數個の油田を合せたもので、シングの産量が一九三九年度一億四千ガロン。

原油の品質は、主としてパラフィン基油で、パラフィン含有量が多い。おほむね脱水の要なく、硫黄含有量が低い。

これらの油田は、ほとんどバーマ・オイル・カムパニーをはじめ英人系の会社が經營し、販賣も右B・O・Cが一手に掌握してゐる。

石油に次ぐ重要鑛産物は、北シャン州ナムツ在のボードウイン鑛山（英人系）から出る銀、鉛、亞鉛、ニッケルの混合鑛である。この鑛山は鑛帯の延長三千呎、鑛脈の幅最長百四十呎乃至百五十呎におよぶ世界稀有のもので、一九三九年度において四十八萬七十噸を産出した。またカレニ州のマウチ鑛山、テナセリム地方のタボイとマガイに錫、タングステンが混合鑛として産出せられる。いづれも原鑛のまゝマレーに送られて處理されてゐる。

北部のルビー・マイン地区のモゴクは、古來有名な寶石地帯である。ことにルビー、サファイ

ヤで名高く、その他各種の寶石が出る。これは現在ビルマ政府の直營になつてゐる。ミチナ地方の硬玉、チンドウイン地方の琥珀もまた著名である。

林業

造船材たるチークによつて代表され、森林總面積は二千二百餘萬英反。産額は不明であるが、ボンベイ・ビルマ貿易會社とスチール兄弟會社が特許されて、年約二十三萬立方噸を輸出してゐる。

工業

右のやうな資源開發は、いづれもイギリスの要求にもとづくもので、イギリスの利益に反するものは一切これを禁壓してゐる。嘗てデルタ地方において農業に匹敵するほどの重さを持つた製鹽業や漁業は、今では全く絶滅せしめられた。まして況んや本國工業製品の獨占市場たるビルマに、工業を許すはずはない。かつてこの國で盛んであつた紡績業も昔の面影なく、造船業も衰退した。今あるビルマの工業といへば、先づ原料品加工業であり、石油の精製、精米、製材などがあげられよう。しかもこれらの工業はほとんど英人（精油、製材）、印度人または華僑（精米）の手に握られてゐる。

貿易

ビルマは輸出超過國である。一九三八—九年度における輸入二億七百八十萬ルビに對し、輸出は四億八千五百萬ルビーで、輸出が輸入の約二倍半になつてゐる。輸出のうち、米の四一%、礦油の三二%、木材の八%と、この三位までの種目で、輸出の八割以上が占められ、しかもそれがほとんど全部印度へ供給せられた。米は全輸出量の六三%が、礦油は國內消費を除いた全部が、チークも六七%が、いづれも印度へ送られてゐる。

次に輸入についてみるに、主位を占めてゐるのは綿製品であるが、その六五%までは印度の新興紡績工業によつて供給され、第二位の鐵鋼も過半が印度から來てゐる。また米の包装用として重要な麻袋はすべて印度に求めてゐる。

かやうにビルマと印度とは、經濟的に依存し合つてゐるわけであるが、その依存の度はいづれが大であるかといふと、それはビルマに對する印度の依存の方がより大きいといへよう。例へば、米についてみても、印度は世界第二の米産國でありながら、國內の消費を賄ふに足りず、不足米をビルマに仰いでゐるが、この一事は印度民衆のビルマ米に對する依存性の深刻なことを示して

る。また石油についても、印度の輸入二億三百萬ガロンのうち六六%までビルマから來、チークの如きは輸入總額のうち九五%をビルマに求めてゐる状態である。

この印度の對ビルマ依存こそ、イギリスがビルマを印度から分離した基礎であつた。印度は近來工業が發達し、イギリスの市場としての價値を減じて來た。それに伴つて國民運動もますます熾烈となつて來た。そこでイギリスは、印度の主食糧と工業原料を持つビルマを分離して、自己の直轄下におき、これによつて印度の死命を制せんとしたわけである。

しかるに今や、このビルマが日本の進撃によつて失はれんとしてゐる。ビルマを失ふことは、印度の死命を代つて日本に制せられることになる。イギリスが蘭印の防衛を放棄してビルマを守らんとする必死の努力はむしろ當然のことといへよう。

三 興亡の歴史

民族の争覇

普通ビルマの歴史は、アノラータ王に始まるといはれてゐる。この王の現はれた十一世紀のはじめ、ビルマには多くの種族が小王國をつくつて互に覇を争つてゐた。なかでも有力なのは、東部の山地にゐるシャン人、南部イラワヂ河の三角洲からマルタバン海岸にかけて蟠踞するタライン人、西南の海岸に王國を持つアラカン人、中部盆地のバガンを都とするビルマ人、とこの四種族であつた。そしてアノラータは、最後のバガン王國の君主であり、彼によつてはじめてビルマ制覇が成し遂げられたのである。このバガン王朝時代は、ビルマ文化の黄金時代ともいふべく、タライン人から攝取した小乗佛教が榮え、佛教美術を中心とする文化の花が爛漫と亂れ咲いた。不幸十三世紀の末、支那統一の餘勢を驅つて進攻し來つた元の忽必烈の大軍のため蹂躪されて、あへなき最後をとげた。元軍撤退ののち、シャン人が一時勢を振ひ、さらに十六世紀の半、ビルマ人タビンシユエチがトングー王朝を立て、シャン地方とタライン王國を除いては、ほぼ全ビルマを従へたが、まもなくタライン人に滅されてしまつた。その後百五十年を経て、十八世紀の半になつて、ビルマ人の中から三度目の英傑が現はれた。これがアランバヤで、

北方シヨエボ（マンダレーの西北）より起り、宿敵タイン人を散々に討ち破つて、一七五四年完全にこれを屈伏せしめたうへ、さらに各地を攻略して、こゝに初めて名實兼ね備はる大ビルマ王國を建設した。これがコンボン王朝で、次の王の代、東はシヤムに兵を進めてこれを滅ぼし、西は印度を攻めてモニブール、アッサムを支配し、北は清の乾隆帝の遠征軍を邀撃してこれを破るなど、勢威四隣を壓したのであるが、その後ヨーロッパ人の魔手に浸され、國歩年と共に艱難を加へ、つひに執拗な英帝國主義の侵略に滅び去つたのである。

英國の侵略 ビルマを最初に訪れたヨーロッパ人は、ヴェニス商人ニコロ・デイ・コンティで、十六世紀の初め、南方テナセリムの海岸に上陸して商業をはじめた。それからポルトガル人、オランダ人、イギリス人と次々にやつて來、海岸地方に商館を設けて貿易に従事した。なかでもポルトガル人の活躍が最も目醒しく、マルタバン灣にのぞむシリヤムといふ町などは、實質上彼等に支配されるまでになつたが、これがため當時強勢を誇るトンゲー王朝の忌諱にふれ、一六二〇年その艦隊は撃滅され、その飛ばつちりを食つて、ビルマ國內の外國勢力は一齊に掃蕩

されてしまつた。

しかしイギリス人は本國の資本主義發展の波に乗り、その後再びやつて來て、一七〇九年には東印度會社の商館を、往年のポルトガル人の基地シリヤムに設け、爾來着々商權の擴張をはかり、百年たつた十九世紀の初頭には、彼等の勢力たるや、ビルマ人の經濟生活を支配するほど強いものになつてゐた。ビルマ人はむろんこれに對して反抗し、たび／＼工場や商館の焼打などをやつたが、さうした行動はいたづらに相手を刺激し、領土獲得へと驅り立てるにすぎなかつた。かうして一八二二年アラカン人の叛亂事件をきっかけとして、第一回の英緬戰爭が起つた。ビルマ軍は善く戦つたが、優秀な武装と訓練された軍隊を持つイギリス軍には齒が立たず、二六年つひに屈伏して、印度寄りのアッサム、アラカン、モニブール、東南のテナセリムの諸地方をイギリスに割譲し、且つ賠償金として英貨百萬磅を支拂ふことを約した。これはビルマにとつて政治的にも經濟的にも非常な痛手であつた。非占領地域を西から南にかけてぐるつと包圍される羽目になつたし、テナセリムには錫、タングステン、鑛山地帯があるからである。

戦後イギリスはマルタバン湾に面するモールメインに占領地域の首府をおき、しばらく鋭鋒を休めてゐたが、失地回復の念に燃えるビルマ人の反英熱は次第に昂まり、一八五二年イラワヂ河でイギリスの汽船がビルマ人に焼き拂はれたことから再び戦争となり、その結果イギリスはベグを中心とするイラワヂ河三角洲の肥沃な平野を割き取つた。そして一八六二年には第一、第二の戦争で獲得した領土を合せて英領印度の一州とし、ラングーンに政廳をおいた。新領土は上ビルマが海へ出る唯一の口であつたから、こゝを抑へたイギリスは、マンダレーに都するビルマ王國の運命を掌中に入れたと同然であつた。

それにもかゝらず、その後ビルマ王國が三十年も存在し得たのは、ビルマがイギリスの意のままに動き、敢て侵略の口實を與へなかつたによる。さういふ意味では、當時の國王ミンドンンの態度は賢明であつたかも知れない。しかし彼は畢竟國難の時代の王者ではなかつた。彼は聰明にして仁慈の心に富み、篤く佛教に歸依したといはれるけれども、一面華美な生活を送り、これが國民の儉安遊惰の氣風を助長せしめたこと少くなかつた。ビルマ人はイギリスの壓制に屈伏する

前、すでに祖先勇武の氣魄を失つた。であるから、次の王チパウの時代になつて、イギリスが最後の決戦を挑んだ時には、もはや起上る氣力さへなかつた。このチパウ王は今なほビルマ人の非難と怨嗟の的となつてゐる。王は王位繼承の際内訌を起し、即位するや反對派の土族高官を多數殺害した。また事毎にイギリスに楯ついて無用の摩擦を惹起した。かうして王朝自ら滅亡の時機を早めたのであるが、一方イギリスとしても早くビルマ全土を領有する必要に迫られて來た。

上ビルマには豊富な鑛物資源がある。さらにそれにつゞく奥地支那は無限の寶庫といはれてゐる。これらについてはイギリスの貿易商が早くから眼をつけ、これを開拓して本國資本主義の繁榮に資するやう、本國政府に向つて建言したのであるが、當時イギリスは印度の確保に手一杯であつたし、また交通不便で輸送に困難であるとの見通しから、せいゝくイラワヂ河を溯つて貿易の利を得るに止つてゐたのである。しかし、印度におけるイギリスとの競争に敗れたフランスが、交趾支那に手をつけ、印度支那深く入らうとするに及んでは、イギリスも黙過出來なくなつた。フランスは安南から雲南へ、或ひはシヤムに入るであらう、それを牽制するためには、せひとも

シヤン州を含めた全ビルマを併合してしまはねばならない。

一方ビルマ王チパウは、フランスがカンボヂヤを保護領とするや、フランスとイギリスとを争はせることによつて、自國を有利に導かうと考へ、フランスの援助を乞ひ武器の購入をはじめた。ところが、それを積んだ船はラングーンから入る外はない。こゝを抑へてゐるイギリスが見逃すはずはなく、武器を積んだ擬裝船は押收され、イラワチ河によるマンダレーへの輸送は絶たれてしまつた。こんなことから一八八五年三たび英緬間に戦端が開かれ、英領印度政府から約一萬の軍隊がビルマの西境を越えて出動し、イラワチ河を溯航したイギリス印度艦隊とともに、各地にビルマ軍を打破り、十一月二十八日首府マンダレーを陥れ、チパウ王を捕へて島流しにした。かうしてビルマ人最後の王朝は第十一代にして滅亡し、同時にビルマ全土はイギリスの手中に歸した。時にわが明治十八年である。

四 壓制と反抗

英國の統治

われわれはすでに第二章においてイギリスのビルマ經濟的搾取の様相を見た。今こゝに併呑後における政治的壓制について一瞥しよう。

戦後イギリスは、ビルマ人の武装を解除するとともに、新領土をも加へて全ビルマを英領印度の一州とし、印度總督の下にある副總督を派遣して統治せしめた。

その後一九二三年になつて、副總督を總督に昇格せしめ、同時に、總督の指名と公選による立法院をおき、別に數名の大吏の職制を設け總督が議員中から任命することとした。

次いで一九三五年イギリスは、ビルマ統治法といふビルマ憲法を制定し、これに基いて一九三七年（昭和十二年）四月一日、ビルマを印度より分離し、英皇帝直轄の準自治領として、英帝の名代たるビルマ總督を置き、また總督の輔佐機關として内閣を置き、上下二院の議會を設けた。

ビルマ分離の狙ひについてはすでに述べたが、分離と同時に右のごとき政治機構をとるに至つたことは、完全併合以來、ビルマ人の反英感情がますます激化し、獨立運動にまで進展して來たので、これを緩和せんがためであつて、ビルマ人の安寧幸福を圖つてなされたものでないことはいふまでもない。むしろビルマ人の參政權を擴張し政治に携はらせることによつて、政治上の紛糾の起つた場合、その責任をビルマ人の大臣や議員に轉嫁しよう、またビルマ人を政争にかりたてることによつて獨立運動の力を分散させようといふ狡猾な魂膽から出たものであつた。

それであるから、内閣や議會はあつても、それらはほとんど無力で、重要な政務はすべてイギリス人たる總督の手に握られてゐた。内閣は單に内政上總督を輔佐する權利を持つてゐるだけで、軍事外交に關しては、一切口が出せない。また内政の中でも、シヤン聯邦州と西北の邊地は別個で、これらの地域は、國防省を通じて總督が直接支配してゐる。従つて内閣のすることゝいへば、シヤン聯邦州と西北邊地を除いた國內問題の處理といふことになるが、この地域を分つ七つの管區の長官がすべてイギリス人であることによつても明かなごとく、ビルマ人の内閣といふ

ものはほんのロボットにすぎない。

次に議會であるが、下院の議席百三十二のうち、ビルマ人九十五、カレン人、印度人、支那人、イギリス人が合せて三十七となつてゐて、ビルマ人が大多數を占めてゐるが、イギリス人はビルマ人以外の議員と組んで自分達の利益を擁護し、少しでもビルマ人の利益になるやうな政策には、こぞつて反對する。上院は定員三十六名で、うち半數が下院議員中から選ばれ、残り半數は總督が任命する。従つてこゝではことごとく親英分子によつて占められてゐる。

かういふ議會であるから、ビルマ人の利益を盛る法案はほとんど通らず、よし通つたとしても、總督には否認權があるから、彼がノーと一言最後にいへば、それまである。これに反し、總督の提出した議案は、たとひ議會で否決されても總督の否認權で通過するのである。

反英獨立運動

日露戰爭における日本の大勝利は、長い間白人の鐵鎖の下に喘いでゐたアジアの諸民族に覺醒と奮起を促した。

そのころビルマにウ・オッタマといふ僧侶が現はれた。彼は日本に學び一九一五年祖國へ歸る

と、先づ「ジャパン」と題する一書を著し、日本はなぜ強敵ロシアを破り得たか、それは日本人が舉國一致外敵にあつたからだ。われわれビルマ人も獨立を欲するならば、日本に倣ひ、ビルマ民族が一致團結しなければならぬと論じ、それから國內をくまなく行脚し、直接ビルマの大衆に向つて、祖國をイギリスの手より解放せよ、獨立に邁進せよと呼びかけた。亡國以來二十年、イギリスの壓制に雌伏を餘儀なくされてゐたビルマの鬱結した不平不満は、この傑僧の情熱と鐵火によつて沸騰した。彼の運動はたちまち全ビルマに擴がり、若きビルマ人にして獨立を口にせざるものなきに至つた。現在ビルマ獨立運動の中心勢力となつてゐる佛教青年會は、當時ウ・オッタマを盟主とするビルマ青年僧侶によつて結成されたものである。このビルマ獨立運動の父ともいふべきウ・オッタマは、その後總督のため國外追放の憂目にあひ、今はすでにこの世にゐない。しかし彼の精神は、ビルマにある若きビルマ人のうちに留つてゐた。以來獨立をめざすビルマ人の反英運動は、幾度となく繰返され、尊い民族の血を流して來たのであるが、今その主なるものを述べてみよう。

(一) サヤ・セインの抗英 一九二九年世界を襲つた經濟恐慌の波は、ビルマの岸にも強く打ちよせた。ビルマ人の大部分を占める農民は耕地を失ひ、困窮のどん底につき落された。政府は彼等の悲境を救はうとしなかつた。かくて一九三〇年ラングーン北方のタラワヂ地方に暴動の火の手があつた。地方の豪族サヤ・セインが佛教の擁護、ビルマ民族の自由獲得を旗印に蹶起したのである。彼らは先づ驛長、村長等公金取扱者が持つてゐる護身の獵銃を奪つて百挺ばかりかき集め、本部を森林の中におき、附近の部落を占領して初めて正式に反英獨立を宣言した。一個聯隊のイギリス兵と印度兵が繰出されたが、機關銃、飛行機等の新銳武器を持ちながら、百名にも足らぬ暴徒のゲリラ戦に遇つて多數の死傷者を出した。この有様をまのあたり見たビルマの農民は翕然サヤ・セイン軍に参加し、武装不備なるにもかゝらず、六ヶ月以上も持ちこたへ、最後にイギリス軍の爆撃に遇つて潰れ去つた。サヤ・セインは捕へられて處刑され、多くの騷擾参加者は或ひは銃殺され或ひは遠方に監禁された。彼等はその後八年バ・モを首班とするビルマ政黨内閣が現はれるまで釋放されなかつた。しかし、この事件はビルマ人に、イギリス軍の實力の

薄弱なることをはつきり見つけた。僅かでも武器を手に入れさへすれば、ビルマの獨立は必ずしも難事にあらずといふ確信を植まつけた。

(二)ラングーンの騷擾 一九三八年、一人の回教徒が、その著書の中で佛教の惡口をいつたといふことから、全ビルマ佛教僧侶の憤激となり、七月二十七日ラングーンのシユエ・ダゴン・バゴダに集合して協議會を開催、出版者を難詰せんと決議して街頭へ繰り出すと、數千のビルマ人がこれに加はり一大示威行進となつた。街々で通行の印度人婦女子が危害を加へられる。これを聞いて印度人が激昂する。ビルマ人が大舉して印度人街に殺到し、印度人商社に投石すれば、印度人もバゴダに向つて闖入する。二日目にはラングーン市内は全く暴動の巷となつた。武装警官と英駐屯軍が數個中隊出動し、各所にバリケードが築かれ、ビルマ全領に戒嚴令が布かれた。やうやく九月二日になつて鎮壓されたが、この騷擾で兩者の死傷者合せて七百名を突破したとのことである。

(三)勞働爭議 一九三八年の末から翌年の初にかけて、一大勞働爭議が起つて騷擾化した。

先づ十二月二日にラングーンで數百名の學生が反英示威運動を行つたが、それが漸次擴大して、翌年の一月五日には戒嚴令が布かれた。十日になると市民がシユエ・ダゴン・バゴダに國民大會を開いて、イギリス人排斥の決議をした。二十一日にはシリヤムにある英資本のビルマ・オイル・コムパニーの製油工場の従業員一千三百名が爭議に入つた。イギリス側はこれに對し、四個中隊の軍隊を出して爭議團本部を包圍し幹部を逮捕した。それでやうやく下火になつたと思ふと、廿九日になつて今度はラングーンの沖仲仕が起ち、爭議は再び逆轉し、それと同時に騷擾は地方にまで波及し、諸所に焼打、掠奪が頻發し、マンダレーでは二萬の民衆が警官隊と衝突し、警官隊の發砲によつて百名餘の死傷者を出した。二月十二日のラングーンにおける爭議團大會において運動は最高潮に達し、ビルマの全政黨が参加、「ビルマをビルマ人に返せ」「奴隸憲法を叩き潰せ」など大書した旗を押したて市内を練り歩いた。この騒ぎのため、時の内閣は責任を負つて總辭職をした。

五 『ビルマ人のビルマ』へ

前章にあげたいくつかの反英事件のうち、後の二つが支那事變が起つてから後の事件であることは、特にわれわれの注意しなければならないところである。

一九三八―九年といへば、ビルマ・ルートが開通した直後である。イギリスがアメリカと組んで、援蔣に大重となつてゐる時、ルートの地元のビルマでは、あのやうな激しい反英運動が繰返されてゐたのである。

ビルマ人は支那事變に對し、イギリスと歩調を合はせることを欲しなかつた。否、むしろアジヤの強國日本が、東亞新秩序の建設に乗り出したのを機會に、日本と協力し、日本の援助を得て、祖國をイギリスの手から奪還しようといふ意見さへあつた。であるから、ビルマ・ルートが開通して援蔣物資が續々支那奥地に向けて輸送されるや、ビルマ人の間に聳々たる非難の聲があ

がり、輸送する援蔣武器を途中で掠奪して、來るべき獨立戰爭に備へよ、といふ強硬論まで飛び出した。一九三九年二月の定時議會でも、ビルマ・ルートが組上にのぼせられ、ビルマ人議員は交起つてこれが禁絶を要求した。たとへば前首相テイモン博士の如きは

「ビルマ政府はビルマ人にとつて何の利益もないビルマ・ルートに對し、何故力瘤を入れるのであるか、しかも事變は完全に重慶の敗北に終らうとしてゐる。東亞の盟主たる日本に楯ついて今まで通り援蔣武器を送つてゐたら、必ず日本に釘をさされる。ビルマ人の利益にならぬことをして、もしビルマ人の生命、財産を脅かすことでもあつたらどうするか。」

と舌鋒鋭く詰めよつた。政府は辯明に苦しみ、博士が降壇するや、全ビルマ議員は萬雷の拍手を送り、ルートを禁絶せよとの聲は議場に漲つた。

また前首相のバ・モ博士は

「支那事變は全アジヤ民族解放の戦ひである。われわれはアジヤ人である以上、日本の行動を妨ぐるものあれば、進んでこれを撃滅すべきである。ルート禁絶は東亞民族結集の一步であり、全

ビルマ人の希望である。」

と叫び、この時もまた拍手鳴りやまず、ビルマ全議員は一斉に起立、議場は騒動となつて、議長も收拾に窮したといはれる。

かやうなビルマ人の反對にもかゝはらず、イギリスはビルマ總督の絶對權を通して、支那向武器陸揚通關料最惠率拂戻案、支那向武器輸送用ガソリン特別免税案を議會に提出、通過せしむるなど、ビルマ・ルートによる輸送を強化したのみならず、直接日本に對する戰爭準備を進め、その一つとしてビルマ内に國防軍を組織した。これに對しては、ビルマ人も積極的に賛意を表した。一見奇異のやうであるが、これまで身に寸鐵を帯びなかつたビルマ人が合法的に軍隊を組織出来るからであつて、當時のビルマ新聞ニュー・ライト・オブ・バーマの言葉をかりれば「この武器—新國防軍—を民族解放、ビルマ獨立の有力な武器たらしめん」がためであつた。しかるにイギリス側は、かうしたビルマ人の動向に危懼の念を抱き、いざ國防軍が組織されるといふと、その組織委員會の民間十名の委員割當を、カレン人三、カチン人四、ビルマ人三として、ビルマ

人の發言權を著しく抑制した。裏切られたビルマ人は激昂し「ビルマの總人口の絶對多數を占めるビルマ人に對する最大の侮辱だ」といきまいた。これが三九年の八月のことであつたが、九月の初め獨英の間に戰爭が勃發するや、コクレン總督は、ビルマ人には何らの相談もなく、ビルマが他の英植民地と同様イギリス側に立つて參戰する旨を宣言した。そこで國防軍問題で油を注がれてゐたビルマ人の反英機運は、つひに點火爆發し、全國にわたる猛烈な反英運動となつて燃え上つた。

同年十二月十四日マンダレーで全國青年僧侶大會が開かれ、次のやうな決議を行つた。

一、精神的にも物質的にもイギリスの對獨作戰に協力せず。ビルマは獨自の見解をもつて所信を斷行する。二、募兵に應ぜず。三、支那人の無制限入國を拒否する。四、ビルマ現憲法を否認し、組閣を拒否する。

この決議は二十日のラングーン青年代表者の會で承認せられたが、なほ中堅層の間には、過去の印度のやうに、またビルマの過去の政治家のやうに、イギリスに獨立を嘆願することはもはや

無用である、好機至らば何時でも實力をもつて主權を奪還すべしといふ意見が現はれた。

このやうなビルマ人の反英機運に對し、イギリスは狼狽して、彈壓、懷柔とさまざまの手をつくし、殊にビルマ人の對蔣感情を和げるためには、重慶側と合作し、親善使節を交換するなど、大重の努力をしたが、ほとんど効果はなかつた。イギリスはビルマ人をして重慶側に味方し、日本に敵對せしめんとしたのである。しかしビルマ人にとつては、敵は重慶でもなければ、日本でもない、イギリスなのである。ビルマ人は、アジヤの盟主と恃む日本が、米英を東亞より驅逐し、祖國をイギリスの手より解放してくれることを願つてゐた。昨年十二月八日を期してこの解放の戦は始つた。先づ香港が陥ち、英領ボルネオが制壓され、マレーも席捲せられ、更にシンガポールが陥落して、對日A B C D包圍陣は微塵に粉碎された。イギリスは蘭印と濠洲を見捨てて、ビルマ防衛に全力を傾注した。

これよりさき、帝國はわれと結んだタイの國土を保全するため、ラングーンをはじめビルマ各地の英空軍基地の爆撃を敢行しつゝあつたが、一月中旬に至り、敵の軍事據點を覆滅するとともに

に援蔣ルートを遮斷せんがため、陸上部隊の進攻を開始、南はタボイ、イエ等テナセリム南部の要地を占領し、一方北方シャン山脈の峻嶒と密林を突破して進撃せる部隊は廿三日コーカレーを、三十一日にはモールメインを占領、更にサルウイン、シッタンの兩河を渡つて猛進をつゞけつゝあつたが、三月七日つひにベグに突入、支那事變以來敵性を擅にし來つた恨みの援蔣ルートに遮斷の鉄を入れ、翌八日には、早くも首都ラングーンに突入、これを掌中に收めた。敵はラングーン守り難しと、早くもマンダレーに遷都したが、われわれがすでに見た如く、ビルマはイラワヂの國であり、ラングーンはそのイラワヂ河の咽喉である。嘗てビルマ王國がイギリスにこの扼されて、その死命を制せられたと同じ運命が奇しくも今イギリスの上に見舞つて來たのである。ビルマ全土の戡定は恐らく早急に完成するであらう。

東條首相は本年一月二十一日發した大東亞宣言において、フィリッピンとともにビルマにも獨立を許與すると言明したが、さらにシンガポール陥落の翌日二月十六日議會において、帝國のビルマ進攻の眞意を明かにするとともに、「ビルマ民衆にして、すでにその無力を暴露せる英國の

現状を正視し、その多年の桎梏より離脱して我に協力し來るにおいては、帝國は欣然として、ビルマ民衆の宿望、すなはち『ビルマ人のビルマ』建設に對し積極的に協力を與へる」旨を約した。これに應へるが如く、作戰以來戰線よりもたらされる通信は、ビルマ人の我軍に對する熱烈な歡迎と協力の數々を報じてゐる。あゝ、『ビルマ人のビルマ』が建設され、ビルマが本然の姿をもつて東亞に立ちかへる日は近い。しかしてその日こそ印度がイギリスの桎梏から離脱する日であり、重慶が抗日の迷夢から醒める時でもあらう。

ビルマ・ルート

一 隊商の路

雲南とビルマの境は、印度支那山脈が南北に走り、文字通り峰巒重疊、その間をメコン、サルウィンをはじめ大小の河が深い峡谷をなして縫つてゐる。人煙稀な未開の地で、支那の中原から見れば、まことに「蠻烟瘴雨の夷地」に外ならなかつた。しかし、この邊疆の山間にも、昔から幾條かの道がついてゐて、支那の商人が馬や牛の背に荷を積んで往來した。支那から生糸、絹織物、紙などを運び、ビルマからは寶石、綿、燕の巢などを持ち込んだのであるが、雨季は路がくづれて通れないから、乾季を選んで、隊商を作つて交通した。チリンノといふ鈴の音が、この谷から聞えてあの嶺に消えた。

これら隊商の道のうち、一番普通に使はれてゐたのは、バーモから入る道、すなはち、ビルマ

のバーモから太平河に沿つて干崖、騰越に進み、東に折れて保山、永平、下關を経て、昆明に至るもので、十三世紀の昔マルコ・ポーロが通つたといはれる路である。バーモには早くから支那人の街が出来、支那隊商の取引する市場が立つて榮えてゐた。

かうした地方的な通商路に過ぎなかつた昔のビルマ・ルートにも、十八世紀の末頃からやうやく「歐洲の風」が吹いて來て、隊商の荷には、ランカシヤの綿織物をはじめイギリス製の商品が混じるやうになつた。

イギリスはビルマを完全に領有する前から、バーモを基點として雲南に入る隊商の路があることを知り、たび／＼調査した末、二度目の英緬戦争ののち、ビルマ王に迫つてこのルートを通る貿易権を獲得した。以來イラワヂ河に汽船を浮かべてバーモまで溯らせるなど、この方面の貿易の伸長に力を注いで來た。ビルマ王國を滅してしまふと、支那と直接境を接することゝなつたが、その國境が不確かであつたのに附込んで、雲南省内に領地を擴げる一方、更に深く奥地支那に食ひ入るために、鐵道を敷かうと企て、一八九七年清國との間に、支那が將來雲南省に鐵道を

敷設する場合は、ビルマの鐵道と連絡させることといふ一項を含む條約を結んだ。そしてラングーン、マンダレー間の鐵道を、東北はラシオ、北はミツチナへと、それ／＼支那領近くまで延ばして、いつでも連絡の出来るやうに備へておいた。

しかし、イギリスの支那侵略は、主に東南の海岸からなされ、阿片戦争で香港を奪つてからめき／＼と發展し、百年足らずの間に南支から揚子江一帯にかけて牢固たる權益を築き上げ、奥地からもこの道を通じて少からぬ利潤を吸ひ上げて來た。それであるから交通至難な西の陸路の方は、どうしてもこの次で、その發展も遅々たるものであつた。

二 滇緬公路の建設

支那では、南京政府になつてから、大に交通網の整備擴充をはかり、鐵道を敷いたり道路を改修したりした。中でも公路、すなはち自動車道路の建設はめざましいものがあり、事變前に全支

通車延長二萬キロといふ記録をうちたてた。この公路建設は、はじめ江西一帯にはびこつてゐた共産軍を討伐する軍隊輸送の必要から着手され、次に邊疆に割據して半ば獨立の状態にあつた軍閥政權を中央化するため、更にやうやく悪化して來た日支關係を反映し、近く日本と戦ふ場合の軍事上の準備といふ意味も加はつて、いよく促進されたのであるが、一貫して首都南京を中心とする集約的な交通網建設であつたから、その素晴らしい發展にも拘らず、邊疆の雲南とビルマを結ぶ公路—滇緬公路—は取上げられてゐなかつた。事變前の南京政府は、まだこの公路の重要性を認めてゐなかつたのである。

この滇緬公路を必要とし、事變前に早くも建設に着手したのは、雲南の軍閥龍雲であつた。彼は雲南省における自己の支配力を一層強固にするため、昭和九年先づ昆明、下關間二七〇キロの隊商路を鋪裝道路に改修をはじめ翌年完了した。そして更に第二段の工事にかゝらうとしてゐた時支那事變が始まつたのであつた。

事變が起るとまもなく、日本海軍によつて支那沿岸水面の封鎖が斷行された。上海が陥ちて、

抗戰支那の對外通商港としては、香港を控へた廣東と、封鎖の眼をくゞる幾つかの小港が残された。しかしこれらも早晚皇軍の攻撃によつて潰滅する。そこで慌てた蔣介石は、はじめてビルマを通ずる通商路の必要を感じ、雲南省政府に大急ぎで、滇緬公路の工事續行を命じた。そして翌年の一月、中央から二百五十萬元、雲南省政府から五十萬元、合せて三百萬元の費用を出して開鑿の一步を踏み出した。

さて、そのコースであるか、保山から先はバーモの方へ向はず、南へ延びて龍陵、芒市、遮放を経て國境の畹町に至るもので、下關と畹町の間が六百キロある。この區間は先にも云つたやうに、雲南でも名だたる險所で、山また山、河また河、山は七、八千呎、までも急勾配とヘヤビンのやうなカーブで上り下りしなければならず、河は瀾滄江（メコン河）怒江、路江（サルウィン河上流）をはじめ何百とあつて、いづれも懸崖の急湍である。そこへ自動車の通る鋪裝道路を作るのであるから、並大抵の仕事ではない。先づ測量から始め、岩石を破壊運搬し、トンネルを掘り、さては雨季に備へて暗渠や側溝も作らねばならず、河には丈夫な橋を架けねばならぬ。と

ところが、さうした近代的道路工事に必要な道具や材料が交通不便のために使用出来ない、一日平均三萬人の苦力を使つて原始的な方法でやつたが、なか／＼抄らない。さうかうしてゐるうちに五月になり雨季に入つた。この地方の雨ときたら日本などでは思ひも及ばぬ猛烈なもので、この豪雨のため折角作つた道路は崩れ落ちる、橋は流される。人車諸共生理になつたり、何千呎もある谷底へ顛落するといふ惨事は頻々と起つた。またこの區間の谷間になつてゐる所は、「死の谷」と呼ばれるマラリヤ地帯で、工事中の苦力がバタ／＼斃れる。その犠牲者は、動員された苦力二十萬のうち、重慶御用新聞の發表によつても二千人以上に達してゐる。

かうした難工のために一時は工事を中止しかつたのであるが、この一線を支那侵略の残された足場とするイギリスが、アメリカとともに聲援を送るし、重慶としても英米の援助を得るためには是非ともこれを仕上げねばならぬので、苦力を補充督促し必死となつて工事を續けた。一方支那側の工事に呼應して、イギリスもビルマ領内のラシオ、晚町間二百キロと、その中間のムゼからバーモへ岐れる線を數萬の苦力を徴發して自動車道路に改修した。

かうして抗戦重慶と、これを助ける英米の努力は遂に實を結び、昭和十三年十一月にはどうやらラシオ、昆明間一〇〇キロの滇緬公路にトラックが通れるやうになつた。

この道路は支那側の道幅三十呎（九呎の歩道が兩側にあり、中央の車道は十二呎）、ビルマ側は二十四呎（歩道兩側各七呎、車道十呎）で、大體二臺のトラックが併行出来る。

昭和十三年十一月といへば、皇軍の猛攻によつて廣東と武漢が相次いで陥落し、粵漢鐵道の援蔣路が死滅し去つた直後である。それ以來米の港として知られたラングーンは援蔣港都に早變りした。こゝに陸揚げされた軍需品は、鐵道もしくはこれに沿ふ自動車道路によつてラシオへ、また大型の組立武器は船でイラワチ河をバーモまで溯り、そこで揚げてムゼを経て晚町へ運ばれ、晚町から滇緬公路で昆明へ、そして更に叙昆、滇黔などの公路によつて重慶はじめ支那の奥地へ輸送されたのである。

尤も拙速主義で作つた路であるから、初めのうちはたゞトラックが通るといふだけで、輸送能率は極めて低く、「三トン積トラック一千四百臺を常置し毎日百臺を走らせ一ヶ月九千トン乃至

一萬トン輸送出来る」といふ重慶の見込を裏切つて、實際は月せいぐ六七千トンで、佛印よりする滇越ルートの一萬八千トンの半分にも及ばなかつた。

しかし昭和十五年六月歐洲戦におけるフランスの敗北の結果、佛印のルートが閉鎖され、更に獨ソ戦の勃發によつて僅か月二百トンにすぎなかつた西北ルートも杜絶しては、ビルマ・ルートこそ残された唯一の援蔣路となつたため、重慶と米英は合作して種々の機關を設けたり、道路を大々的に改修したりして、輸送の圓滑をはかる一方、このルートの確保と防衛に死物狂ひの努力を拂ふやうになつた。

三 ビルマ・ルート禁絶まで

援蔣禁絶要求を英拒絶

かういふわけでビルマ・ルートの本格的な輸送が開始されたのは、昭和十三年十一月のことであつた。最初の四、五ヶ月間において約八千トンの武器、彈藥が、こ

のルートを通じて重慶に送りこまれたといふ話である。米英兩國は支那事變の進展につれて、支那大陸に在る自國權益が漸次喪失することを憂慮し、これを防止する意味から日本の東亞新秩序建設を眞つ向から反對、ビルマ・ルートを通じて大量の援蔣軍需物資を注ぎ込むことによつて重慶政權を對日抗戰の矢面に立たせようとしたのである。

かうした米英兩國の態度は支那事變處理、ひいては東亞共榮圈建設といふわが大理想遂行上斷じて黙認し得ないので、このルートを利用する援蔣物資の輸送はやめて欲しいと早速イギリス政府に對して警告を發し、イギリス側の正式回答を要求したのであつた。

その警告といふのは

- 一、ビルマ當局は援蔣物資の輸送禁絶のため自發的措施を講ずること
 - 二、右の輸送禁絶を監視するため、わが方では検査員を派遣すること
 - 三、ビルマ當局はわが検査員に協力し、便宜を供與すること
- などの三項目にわたつた。しかしこれに對するイギリス側の見解は、ビルマ・ルートを通ずる軍

需品は、大部分がアメリカ製品で、この他にソ聯製品が外蒙及び新疆から輸送されてゐること、また歐洲動亂の現段階において實際問題として、イギリスは軍需品を他國に輸出する能力などはないと稱して、ビルマ・ルートが必ずしもイギリスの援蔣ルートではないと大いに辯明これつとめた。

昭和十五年七月八日、クレイギー駐日英大使は、本國政府の訓令であるといつて「ビルマ・ルートを通じて奥地支那へ送りこまれる物資について調査してみたが、この中には外國産のものもあるし、またインド、ビルマ産のものもある。インド、ビルマ産の物資の輸送を禁止することは合法的ではない」旨を申傳へて來たが、これはビルマ・ルート禁絶に關するさきの帝國政府の要求を拒絶したものである。しかしてこの拒絶の裏には、イギリスは東亞において、アメリカと同一歩調をとらうとその鼻息をうかゞひ、アメリカの出方に追従してゐるとみられること、および對獨戰爭の敗退による國際的並びに國內的な威信の失墜を挽回せんがために、日本に對して強硬態度に出ることが得策と考へられたことなどが含まれてゐる。

帝國政府が援蔣物資の輸送禁絶を要求したことは、別段法的な根據からそれをなしたのではなく、東亞における交戦状態を出来るだけ速かになくするために、政治的な考慮から友誼的措置に出ることを要求したものである。したがつてイギリス側のかくの如き回答に對して帝國政府がすこぶる不満足の意を表したことはいふまでもない。

突如、日英諒解成立 ところが、同年七月十七日に至つて、突如として援蔣禁絶に關する日英諒解が成立したのである。すなはちクレイギーは、時の有田外相を訪問して左の如く語つた。

「ビルマ・ルートの援蔣物資輸送禁絶問題に關する日本政府の要求については、イギリス側においても種々考究を重ねてみたが、大體原則的に日本政府の要求を受諾することになつたので、この旨御諒承願ひたい」

かくて公けにされた日英諒解の内容は大要左の如きものであつた。

(一) イギリスはビルマ・ルートを通じての武器、彈藥、トラツク、ガソリン、鐵道材料な

どの援蔣物資の輸送を向ふ三ヶ月間禁止する。

(一) 必要ある場合は、ラングーンの帝國領事館員がラングーンに在つて、援蔣物資輸送禁止の實績を調査する。このためわが方はラングーンの領事館員を増派する。

この諒解事項は、大體先きに發せられたわが警告の線に沿つたものであるが、イギリスが武器彈藥及びトラック、ガソリンのみに限つて、しかも三ヶ月間といふ期限を切つて日本の要求を容れたことは、イギリスが日本の支那事變處理、東亞新秩序建設に對して積極的な協力をなす意圖から出たものではなく、七月から三ヶ月といふ期間は大體において雨期であり、この間ビルマ・ルートは通過は困難となるので、これを閉鎖しても實質的な影響はほとんどなく、したがつてこれを一時閉鎖することによつて、日本の顔も何とか立てることが出来るし、困難な問題の解決を時的に引延ばすことも出来るといふ例のイギリス獨得の老獪なる策略であつたと見る事が出来る。この三ヶ月間にイギリスが窺つた情勢の轉換といふものは、まづ歐洲戦争の見通しがつき、イギリスが東亞において強硬策をとり得るに至るかも知れないといふこと、第二に蔣政權そのも

のが參つてしまひ、ビルマ・ルート問題の如きが起る餘地がなくなるかも知れないといふこと、さらにアメリカが東亞において強硬策をとるかも知れぬといつたあらゆる場合に考慮をめぐらしたのであつた。

しかしイギリスの眞意がかくの如きものであつたにせよ、そのビルマ・ルート禁絶は重慶政權を少からず驚愕せしめた。當時の重慶發ルーターはこの間の事情を左の如く傳へてゐる。

ビルマ・ルート輸送禁絶に伴ひ、歐洲民主々義諸國の對蔣援助がもはや絶望となつたので、對外政策再建の實現を企圖してゐる。重慶政權首脳部をはじめ各政治家は、ビルマ・ルート禁絶問題に關して「重慶政權に對するイギリスの道義上並びに法律上のあらゆる義務に對する公然たる裏切である」との意見を發表した。

ビルマ・ルートの三ヶ月間閉鎖も、重慶側の狼狽といふ餘興があつたが、前述したやうにイギリス側にとつては大した影響もなく過ぎていつた。そして禁絶に關する日英暫定協定も同年十月十七日を以て三ヶ月の期限満了といふことになつた。期限満了を前にして日英兩國政府では、そ

の效力延長に關する話合ひを進めたが、イギリス側ではこれに難色を示し、バトラー英外務次官の如き「目下の情勢において、同協定の再交渉は不可能である」とて言外にビルマ・ルートの再開を仄めかした。この發言には多分にアメリカ側の意向を反映したのである。アメリカは同年七月、この日英諒解が成立した當時より、すでに國際通商の自由尊重に藉口して、帝國の南進を恐れて極力この協定の成立を阻止せんとして來た事實があり、イギリスに對してビルマ・ルートの再開を強硬に主張して來たのであつた。かくて禁絶期限滿了後も當然再交渉によつて禁絶が續されるものと信じてゐた帝國の期待は裏切られたのであつた。

四 ビルマ・ルート再開

米強硬に再開を主張　イギリスはビルマ・ルート禁絶三ヶ月の間に何らか自己に有利なる情勢の展開を希望したのであるが、昭和十五年九月二十七日、日獨伊三國同盟の成立が突如發

表されて、こゝに狼狽の色を一そう濃くした。イギリスとともにアメリカの狼狽も相當なもので、早速報復的に二千五百萬ドルの借款を重慶に供與したことなどその氣持を端的に表現してゐる。

重慶からタンゲステン、桐油その他を貰ふかはりに、これに軍需品や現金を與へて對日抗戦に油を注がうとした、しかしてこれら諸物資の搬入にはビルマ・ルートを利用せねばならぬので、その再開を強硬に主張してゐた。ハル長官は、記者團との會見で「イギリスはアメリカと協議した上で、ビルマ・ルートの再開を用意してゐることであるが」といふ質問に對して、「すでにアメリカは最初からビルマ・ルートの閉鎖に反對して來たのである」と答へて、アメリカ側の肚を表明した。

重慶政權ではビルマ・ルートの閉鎖は自己の死活に關する大問題であるから、英米側のかうした動きを見てとり、あらゆる方法で米英兩國に必死の歎願が始まつた。國民參政會では數十名の委員連名でイギリスの上下兩院有力者に對し、對日妥協政策の放棄、ビルマ・ルートの無條件再

開を要求した。またアメリカに對しても、米蔣相互間の連絡路確保のためにはビルマ・ルートの再開こそ必要であると運動した。これらの重慶側の歎願はとも角として、イギリスとしてはアメリカ側の意向を多分に織込んで、期限満了と同時に頑強にビルマ・ルートの再開を決意した。現狀維持を固守する米英兩國は、日獨伊三國同盟を對日反撃の有力なる材料として取上げ、こゝにビルマ・ルート再開の機運は全く熟した。

ビルマ・ルート再開さる

十月八日、チャーチル英首相は、議會において「ビルマ・ルートを再開する」と言明した。その結果、ビルマ・ルートは十月十八日の未明を期して三ヶ月ぶりに再開された。禁絶期間中、山積してゐた米・英の援蔣物資は幾千臺のトラックに満載され、ラシオから國境を越えて、昆明、重慶へと雪崩の如く輸送が開始された。重慶では早速、イギリスより五十萬ポンドを借款して會養甫（滇緬鐵道建設所長）が中心になつて、ビルマ・ルートにガソリン供給所や、休憩所、トラック修理所などの増設を行つた。

ルート閉鎖前は平均月額四千トンにしか過ぎなかつた輸送量が、再開後はとにかく月七千トン

から八千トンにも及んだといふことである。

わが航空部隊は、この頃皇軍の佛印進駐の完了を見てゐたので、雲南、四川一帶の制空權を掌中に收めてをり、十月二十五日にはメコン河の功果橋、同二十九日にはサルウィン河の惠通橋を爆撃、粉碎して米・英・蔣の敵性に斷乎として反撃を加へた。

ビルマ・ルートの再開は、心理的にはイギリスの對日反撃として、一應大向ふの喝采を浴びたが、實質的に果していくばくの價値を有するものか極めて疑問視された。その一つの現はれとしてニューヨーク・タイムスの前上海特派員アーベントは次の如く述べてゐる。

日本の佛印進駐で、昆明までの飛行時間は四十五分間に短縮された。これからは天氣もよくなり爆撃には好都合だから、どれほど多くの人夫を準備しても、爆撃による穴や、破壊された橋を修理しながら夜間だけ荷物を運ぶやうでは、大した効果は期待出來ない。ビルマ・ルート閉止前には月七千トンの運搬量が最大能力であつたが、今後は月一萬二千トンづつ運ぶ計畫が立てられてゐるやうであるが、實際は七千トンも怪しいことである。このルートの利用に對し

てビルマ人の間に反抗の氣勢のあることは、つとにイギリス官邊も認めてゐるところだ。これは別にビルマの安全を脅かすほどの問題ではないが、交通妨害になることは確かである。重慶政權では、雨期の終りには一萬三千臺のトラックを準備して送る積りであつたが、佛印よりの援蔣ルートが斷絶され、且つトラックは著るしく減少してしまつてゐるのが現状である。

またある外人専門家の同ルートの視察談によれば、ビルマ・ルートの最難所は永平、保山間のメコン河及び保山、龍陵間のサルウィン河の溪谷であり、前者の如きは三千メートル近い山頂から一千メートルの谷底まで降下し、再び同じ高度をのぼるので、稻妻型の急カーブ、急勾配が連続してゐて、勿論大型自動車は不可能であるし、二トン積トラックがせいぜいこの限度で、且つ運轉手は必ず二名必要である。現在西南支那における自動車数は軍事委員會に屬するものを除いて、西南運輸公司の八百臺、交通部西南運輸管理局の五百臺、そのほか復興公司、中央信託局運輸部などの大小運輸機關に屬するものを合せると三千臺位であると概算されてゐる。しかしその三分の一は修繕中で、他の三分の一は部分品不足で運轉出来ない状態である。このルートは

雨期には交通が全く杜絶してしまひ、乾期でも現在の道路施設では乗用車で時速三十キロ、トラックでは十八キロ以上は危険である。しかも夜間の運轉は不可能だから、この調子だと昆明からラシオまで六、七日を要するものと見ねばならぬ。従つて一ヶ月にこの間を一往復半するのが一杯である。これらの條件を考慮に入れれば、ビルマ・ルートの輸送能力は月三千トンと見るのが當つてゐるやうだ——といふのである。

英の援蔣ますく／＼露骨

しかしながら重慶としては、このルートこそは抗戦のための最後の輸血路であるが故に、同ルートの再開によつて米・英兩國の援蔣行爲はますく／＼強化されるものと確信し、ルートの確保に躍起の工作をはじめた。

ビルマ政府派遣の重慶訪問使節團といふのが昨年一月十五日重慶に行つてゐる。この使節團は重慶到着後、直ちに重慶政權と滇緬鐵道敷設問題、國境畫定問題、通商問題、移民問題などについて兩國間多年の懸案解決に關して討議したのをはじめ、同年二月下旬以來英、蔣間に軍事的に何らかの提案が策されたものとみえて、イギリス軍切つての東亞通といはれるダンツ將軍が、駐

支武官に任命された。かうした工作をおし進めてゐるうちに、帝國の佛印進駐から、ひいては泰國に軍事基地を設置するに至るであらうといふ危懼がだん／＼昂まつて、重慶はもろ／＼狼狽するし、それに輪をかけて米、英の懷疑は深まつてゆく一方だつた。重慶ではいち早く米英側のかかる疑心をとり上げて、つひに英蔣共同防衛の密約を締結したのである。この密約は大體左の如きものといはれる。

(一) イギリスはインド、ビルマより軍需品を重慶に送り、この貨物輸送の基地をシンガポールに設ける。

(二) インド、ビルマ、シンガポールに飛行機組立工場を設立して、飛行機を重慶に供給する。

(三) 南洋各地の華僑及び原住民をして、本協定を支持せしめ、これに人的、物的資源を動員させる。

(四) イギリスの對日宣戰と同時に、重慶軍を南下せしめて、イギリス東亞軍司令官ポバム大將の指揮下に入れる。

この密約によつて重慶政權は、皇軍の佛印進駐以來漸次困難さを加へて來たビルマ・ルートの確保のため、イギリスを對日共同戦線に立たせようとしたのであるが、イギリスはイギリスで、日本軍が一朝反撃に出た場合の東亞における英國植民地の防衛に重慶軍を利用しようと試みたのであつた。

ビルマ・ルート委員會

重慶政權は右の英蔣共同防衛を締結するとともに、一方におい

てビルマ政府代表との協議によつてビルマ・ルート委員會を創設した。これは同ルートの運輸機關の一元化を目的としたもので、委員長にアメリカ赤十字駐支代表ジョン・ペーカーを推した。ところがこのことは皮肉にもビルマ・ルートの物資輸送に關する實權を事實上アメリカの掌中に歸せしめる結果となつた。しかし重慶としては、重慶軍のビルマ進駐を契機とする英蔣合作の進展の場合と同様に、米蔣の提携によつて日本の南進をあくまでも牽制しようとする意圖に出たことは明らかであつて、援蔣物資の輸入とタンダステンその他のアメリカ向け原料物資の輸送が、この新設された委員會によつて促進されたことは事實であつた。

この前後からアメリカの進出やうやく目ざましく、援蔣強化の見地からビルマとの間に貿易協定を結び、ビルマ・ルートを通じて無制限に援蔣軍需品を供給するため、この協定に基いて六月一日に遡つて、相互の輸入品に對するトン税及び差別税を撤廃することとした。しかし、かうした條件の下に開始されたビルマ・ルートの輸送状態はどうであつたか。當時アメリカから積出された援蔣物資は、マニラとラングーンに山積されてゐた。ビルマ・ルートの輸送能力はその當時一日僅か百トンに過ぎず、その大部分はガソリンで、ラングーンとマニラにおける滞貨の輸送には少く見積つて二十ヶ月は要するだらうといはれ、同ルート輸送力の強化は、重慶の緊急問題としてとりあげられた。しかもアメリカから派遣された運輸専門家とともに、輸送力のスピード・アップ並びに輸送量の増大に關して研究を進めたが、間斷なきわが航空部隊の猛爆と重慶抗戦力の著しい低下は、つひに弱り切つたルートの實體を暴露するのみであつた。

昭和十四年五月、同ルートの全線通車を見た當時は、雲南自動車會社、交通部滇緬公路局、軍事委員會西南運輸處によつて輸送されたトラックの總数は約三千臺であつたといはれたが、實際

に運用されたのは同年の下半期と、一昨年の一ヶ年間に於いて約七百臺といふ有様であつた。シオから昆明への所要日數も、もとく一週間と豫定されたものであつたが、大部分のトラックは八日乃至九日を要し、一日の運轉臺數も約五十臺で、その輸送力も百二十五トン、毎月僅かに三、四千トンといつたところが實情であつたやうだ。その最高記録としては昭和十五年七月から九月に至る三ヶ月間で、約三萬六千トン、月平均一萬二千トンを算したこともあつた。これらは同ルートを通じて重慶その他奥地支那に送りこまれた分であるが、一昨年において、このルートから輸出された數量は九千五百四十六トンで、桐油が一ばん多く、タングステン、錫がこれに次ぎ、いづれも殆んどアメリカに輸出された。しかしながら、これらの輸出量は、同年度の輸入量に比較すれば六分の一にも及ばないといふことであつた。

五 ビルマ・ルートの危機

ルートの危機説

ビルマ・ルートをめぐる国際情勢はますます複雑微妙を極め、米、英兩國はこのルートを確保して重慶政権に輸血をなすことにより、蔣を對日抗戦の矢面に立たしめ、あはよくば自己陣營の防衛に重慶軍を利用せんとたくらみ、ビルマ・ルートを中心として、ラングーン、シンガポール、蘭印、濠洲、比島などを結んで對日威嚇の大鐵環をこゝに構成し、太平洋の危機を日増しに濃くしていつた。この間いはゆる近衛聲明が發せられて、太平洋の痛檢討に關する日米會談が開始された。帝國は在米野村大使に加へて來栖大使をわざわざ派遣し、昨年四月以來兩國々交の調整に關して誠意を以て當つたことは周知の如くである。しかしながらアメリカ政府は、イギリスその他の敵性國家群と苟合策動し、終始東亞における帝國の新秩序建設による平和確立の努力を妨害せんとしたのみならず、日支兩國を相鬪はしめて、太平洋における覇權を掌握せんとする年來の野望をますます露骨にした。日本政府の誠意を無視して日米會談の進行中にも拘らず、マニラにおいて、香港において、または重慶においてアメリカをリーダーとする敵性國家群は軍事的、經濟的な會談を開催、對日示威に狂奔した。

かうした關係から東亞危機説が傳へられた。昨年十一月十五日前後、日米間あるひは日英間に衝突が惹起するであらうといふのがそれで、その衝突はまづ日本軍のビルマ・ルート攻撃といふ形をとるであらうといふ見通しから東亞危機説は、そのまゝビルマ・ルート危機説に置きかへられた。敵性諸國家は南支や北部佛印における日本軍の行動に神經をいたくとがらし始めた。

この時、蔣介石の政治顧問ラチモアは、ビルマ・ルートの視察を行ひ、昆明において龍雲と會見し、ビルマ・ルートの防衛問題について具體的な協議を行つたが、重慶に歸つてからは政治、交通問題のみでなく、軍事の點にまで立入つて蔣介石に進言した。その時龍雲は「日本軍が雲南に來襲すれば、全省の軍民をあげて最後の一人まで抵抗する決意である。雲南省は山岳重疊としてゐるから、攻撃軍は必敗を免れないであらう」と強がりはいひ、重慶でも「ビルマ・ルートの保衛には、いかなる犠牲をも惜しまない」と豪語してゐる。

白崇禧や何應欽も廣西、雲南兩省の兵備狀況を具さに視察し、またアメリカ軍事代表團の一部も十月下旬ビルマ・ルートの視察に出かけ、特に文山飛行場の施設を詳細に見學してゐる。また

英インド軍司令官ウエーヴェルがビルマの西北部を視察してのち、十一月二日シンガポールに着、同地でインド、ビルマ、海峽植民地の連絡作戦に關して密議を行つた。また重慶に滞在中であつたビルマ政府經濟顧問バクスターも、ビルマ總督ドーマン・スミスの急電に接して十一月一日、飛行機でラングーンに歸還した。これら慌だしい人の動きに徴しても彼らのいはゆるビルマ・ルート危機説にいかにも狼狽したかを見る事が出来るであらう。

ルート管理權を米に委託

しかしビルマ・ルート危機説をとり立て、騒いだのは重慶政權であつて、米英に對してこれが防衛に關する積極的な援助を懇請したのである。米・英はかくて重慶の宣傳に踊らされたるかたちで、重慶としても抜け目ないところを見せて同ルートの統一的な管理運營權をアメリカに委託することを頼んだのであつた。もともとこのルートは道路の建設及び修理に關する権利の割當や道路の利用に際しての利害の分擔、道路の國境地帯における接續連絡、運輸機關の運營權等において、米、英、ビルマ、重慶の權益が錯綜し、ルートの管理は全く統一を缺いてゐたし、そのため輸送能率はすこぶる振はぬ状態にあつた。したがつて、一た

びこの方面に重大事態が発生した場合、かうした混亂状態では軍事的見地からいつても甚だ心許ないわけであつた。蔣介石はイギリスと協議して、この措置に出たもののやうである。

重慶では、さらにビルマ・ルート防衛の國際空軍力の強化も急務であり、そのためにはアメリカ人の義勇飛行士、特にビルマ・ルート防衛の飛行隊を増強するのが急務だと力説し、米英兩當局の積極的な協力を求めたのであつた。

この結果、昆明に華南邊區防衛總部が設置され、この參謀部の中に米、英、ソ聯の軍事代表を參加させて、雲南の防備を統轄させ、さらに雲南省内のある基地にイギリス東亞軍と、アメリカ駐比軍の合作による空軍部隊を配置して、重慶軍と協力せしめることとなつた。情勢によつてはマレー方面の空軍及び機械化部隊をこちらの方へ廻してもよいといふのがその當時の取極めであつたやうだ。またビルマ・ルート國境附近の騰越には重慶・ビルマ聯防機構が組織され、この中にアメリカ軍事使節團が參加し、將來はラシオにあるイギリス軍の指揮部と密接な連絡をとることも決めた。またビルマにあるイギリス軍との合作の圓滑を期するため、マグルーダー代將の意見

をいれて、廣西省の基地にも聯防機構を設置することとなつた。

マグルーダー作戦を指導

以上述べたところでもわかるやうに、ビルマ・ルートが將來日

本軍の攻撃をうけた場合における米、英、蔣三國共同行動に關する取りきめは一應出來上つた。そして昆明滞在中のアメリカ軍事使節マグルーダー代將は、日本の雲南進撃に對處すべき防衛計畫に關して、重慶軍各將領の作戦指導に當つてをり、さらにその後何應欽、程潛、楊杰、商震をまじへて蔣介石と會議の席上、マグルーダーは西南防備計畫を遂行するためには、その作戦指導權を自分に與へられない限りは事態の好轉は望まれぬと要求した。

また重慶に在るアメリカ大使館陸軍武官輔佐官ジエームス・ウィルソン大尉は數百臺のアメリカ製トラックを使用して、ビルマ・ルートを通ずる援蔣物資輸送の指揮に當つた。しかして日本軍の空襲に備へて同ルート周邊のあらゆる個所には高射砲陣地が續々構築されたし、また隱蔽飛行場も出來たと傳へられてゐる。

運営ますます混乱

ところで、その後ビルマ・ルートの輸送力は順調であつたらうかとい

ふに、一向捗らず、イギリス東亞使節ダフ・クーバーも「輸送力の停頓はビルマ・ルート輸送當局の事務怠慢の結果である」と痛烈なる結論を下した。その後活用されてゐるビルマ・ルート運営狀況を概観すれば大體左の如き多數の機關が分立、對立して、そのため相互の繩張り争ひは恐ろしいもので、輸送の混乱ぶりは當然想像されるし、重慶抗戰態勢の矛盾を露呈したものと睨めても興味深い。

(一) 西南運輸公司是重慶側最大の輸送機關であるが、これは軍政部兵器局の軍需品のみを輸送してゐる。所有トラックは一千臺、昨年四月の輸送量は昆明より重慶へ僅か四十五トンである。この輸送力を以てすれば、ラシオからビルマ各所のストック（いづれも兵器局所屬の軍需品）の輸送完了には三ヶ年を要することとなる。

(二) 支那運輸公司是西南運輸公司の業績不振によつて、交通部が新設したものであるが、西南運輸公司是強力なる政治的背景を有し、この新会社に容易に活動の餘地を與へず、もつぱら軍需品以外の政府物資の輸送に當つてゐる。

(三) 公路輸送管理局は交通部において支那運輸公路の活動を容易ならしめるため新設されたものであるが、これが新設に當つて既存の公路管理局との間に紛争を生じ、任務は支那全公路の輸送管理であるが、これは従來、公路管理局の行つて來た分野で、兩者對立の形である。

(四) 公路管理局は交通部の支局であり、公路の建設維持を任務として存在して來たものであるが、前項の公路輸送管理局の新設によつて、著るしくその権限を縮小されてしまつた。しかし依然各公路においてトラック輸送を行つてゐる。

(五) 滇緬公路管理局は、もつぱらビルマ・ルートを維持することを任務とするが、これも自己所屬のトラックを以て一部の輸送に當つてゐるに過ぎない。

(六) 財政部國家資源委員會は、非占領地區における各種鑛産物の搬出、輸出に當つてゐる。

(七) 工鑛業調整委員會は各工場、鑛山用工作機械の輸入に任ずる。

(八) その他小會社、一般商業用輸送などの軍需品以外は、表面上統制を強化されて輸送困難

であるが、實際には官吏に對する贈賄によつて容易に輸送を行つてゐるらしい。重慶參政會でも、右の如きルート運営狀況の混亂ぶりを重視し、討議の結果左の如き條項をあげて政府を督勵し、なほ五人乃至九人の特別使節をビルマに送り、輸送の實情調査を行はせたのである。

一、ビルマ・ルート管理局機構の全面的改組を行ひ、各部局間の事務割當及び連絡を調整する。

一、技術部、輸送部その他一般職員の能率の増進をはかる。

一、支出及び収入を合理化する。

一、職員の状態の調査。

一、自動車運轉手の業務監督の強化。

ビルマ・ルート哨戒を發表

ビルマ・ルートの保衛に漸次深入りしつゝあつたアメリカは昨年十一月に入つて、萬一の場合に備へて物資輸送の安全を期するため、ビルマ・ルート上空

の哨戒を實行すると發表したのである。この頃日米會談はいよく危機をはらみ、一觸即發の狀態にあつたので、アメリカはこれに對する對日威嚇的な謀略を多分に盛つたことは間違ひなからう。増長するといふにも限度があるが、この哨戒なるものは、アメリカが當時大西洋の防衛水域上空を哨戒してゐたいはゞ『防衛空域』といったものを東亞の空にまで延長しようとしたことを意味し、政治的、軍事的觀點からしても、これはわが方として絶對看過し得ない重大事態が到來したわけである。その哨戒がアメリカ空軍によつて行はれる場合は、それは完全に米英蔣蘭陣營の協議に基くものであることは明瞭であつて、わが方でも、對日包圍陣共同の最も露骨な武力的抗戦と見做さざるを得ぬところまで押詰つた。

その後マニラにおいて判明したところによれば、アメリカ飛行機によつて構成され、アメリカ人パイロットによつて操縦される米人のみより成る部隊が、重慶側國旗を掲げてビルマ・ルート防衛に乗出したといふことであつた。

西南支那に重慶軍集結

一方重慶政權内の軍事的動きはどうであつたかといへば、丁度

日本軍が南部佛印に進駐するや、日本の泰國進駐、さらにビルマ・ルートの危機、西南支那の危機を直接感じるやうになつた。俄然本腰を入れてビルマ・ルートの防衛に乗出し、同ルートを中心として西南支那一帯に兵力を配備し、佛印に在る皇軍に一大包圍の態勢を示したのだ。

アメリカの援蔣政策の結論は「蒋介石の對日抗戦力は西南支那の強化にかゝつてゐる」といふ點に存し、その結果、具體的には西南支那の政治状態を、蒋介石の統制下に完全に入れしめるといふことを前提として、西南支那の防禦力を最高度に充實しようと圖つた。ビルマ・ルートを強化して重慶への軍需品輸送動脈となし、同時に西南支那の資源を開發して對米輸出力を最高度にあげるその意味がこゝに判然するわけである。

したがつて西南支那防衛には、前述した如くマグルーダーがその全權を握り、つねに重慶軍事首腦者と作戦を協議してゐる。このたびの作戦には第四戰區司令長官張發奎を總指揮官として、中央軍七個師、廣西軍七個師、廣東軍一個師、雲南軍三個師であつて、合計十八個師、兵力凡そ二十萬の大軍が集結した。また直接ビルマ・ルート上にある重慶軍は中央軍七個師、四川軍二個師、

雲南軍一個師合計十個師、兵力約十萬と稱せられた。

この西南總司令部は昆明に置かれ、何應欽、白崇禧が正、副總司令官を兼任し、商震及び賀耀祖が總司令部軍事委員として英米東亞軍との連絡に當ることなども決定された。

六 大東亞戰爭の勃發

重慶の大狼狽 大體以上において述べたやうに、米英蔣蘭對日包圍陣の結成によつて、彼等反樞軸諸國家群は日本殲滅の準備がこゝに全く完了したと豪語し、重慶もその尻馬によつて、笑止にも彼等の勝利はもはや單なる時間の問題に過ぎないと放言し、盲信した。

かくの如く反樞軸諸國家群が自己陣營の勝利を夢みて有頂天になつてゐる時、一方において太平洋の運命をかけて繼續してゐた日米會談は、アメリカ側の認識不足と不誠意、暴慢不遜なる態度によつてつひに決裂し、昭和十六年十二月八日、大東亞戰爭の火蓋が切られた。つひにその日

が來たのだ。そして勇壯無比なる皇軍の鋒先は、彼らが想像した通りビルマ・ルートの攻撃であつたらうか。いな、それはハワイであり、比島であり、香港であり、マレーであつた。その素早い戦果の發展に度膽を抜かれたのは全く重慶政權そのものであつた。

それは抗日の大黒柱ともいふべき米・英からの武器援助が、必然的に斷絶することを意味する。米・英は従來重慶政權を援助することによつて間接的に日本に對して壓迫を加へて來たが、大東亞戰爭の勃發によつて、もはやかゝる間接的な壓迫を日本に加へる餘裕などはなくなり、全力をあげて、對日武力戦に傾倒しなければならぬといふ危急存亡の事態に直面せねばならなかつたからである。重慶は今後獨力を以て對日戰爭を繼續せねばならぬ絶體絶命の立場に追込まれたのだ。

開戦劈頭の比島、ハワイ方面における惨敗に狼狽した米大統領ルーズヴェルトは、蔣介石に對して抗日戰爭の繼續方を要請し、今後對日積極作戰を遂行するならば、その代償として援將を更に強化すると約束した。そして本年二月初、米英兩國は重慶に對しそれぞれ五億ドル、五千萬ポ

ンドの借款を供與することに決定した。しかしすでにシンガポールは陥落し、マラッカ海峡の制壓も出来、ラングーンの陥落などによつてビルマ・ルートの利用價值が無に等しいものになつた現在、折角のルーズヴェルトの援蔣強化の約束も、單なる空證文に化し果てたといふのも皮肉である。

イギリスは、開戦間もなく香港を奪はれ、ついでマレーも制壓され、東亞唯一の根據地と誇つたシンガポールもつひに攻略されるに及んで、いよいよインド防衛には眞剣な考慮を拂はざるを得なくなり、インド防衛のためにはビルマを確保せねばならぬので、米蔣との合作によつてマンガレー、ラングーンなどを中心に大軍を集結し、日本軍に備へた。昨年末、英インド軍總司令官兼ビルマ軍司令官ウエーヴェルはこんな警告を出した。「日本軍がビルマに根據地を獲得すれば、印度方面に出撃する可能性が多分に生じ、インド全土の英空軍基地と、印度洋の各港に及び航行船舶は日本軍の爆撃下に曝されることになる。しかもビルマは交通の要衝で、特に重慶への物資援助の基地であるから、援蔣物資の輸送は完全に杜絶する」

この警告が出てから三ヶ月経つか経たぬかでラングーンをはじめビルマ領内の重要軍事基地はわが手に歸した。かくも速かにわがビルマ作戦が進展しやうとは英國も、重慶も想像しなかつたであらう。これは偏へに皇軍の奮戦に負ふところであるが、その蔭にあつて英、蔣聯合軍の無統制な醜態ぶりを看過することも出来ない。

英、蔣の齟齬 大東亞戦争勃發直前、まだ反樞軸國家群の虚勢華かなりし頃、ビルマ防衛を呼號して一應成立した觀のあつた英、蔣軍間の密約も、所詮幾多の矛盾を醗釀し、反樞軸國家群の聯合防衛なるものが、いかに懸け聲のみに終始して、結局机上計畫の効果以上に出でないものであるかが暴露された。

すなはち重慶側は、ビルマ作戦開始當初、ラングーンが日本軍の手に歸しても重慶の抗戦には何の影響もないと豪語したが、戦局の進展につれて、ビルマは重慶の抗戦にとつてすこぶる重要であり、唯一の輸血路を失ふことはすこぶる立場を危険にするものと告白してゐる。この告白は、要するに支那を利用して自己權益を防衛せんとしたイギリスの狡猾な策略を牽制せんとした

もので、そのこと自體が英蔣聯合防衛に關する指揮權の歸趨をめぐつて混亂を生じてゐる證左である。

ウエーヴェルは、日本軍のビルマ作戦進捗にともなひ、ビルマ政府をラングーンよりマンガレ一に移轉するとともに、ビルマ・ルートの關門であり、援蔣物資の輸送基地であつたラングーンの地位をベンガル灣のチャゴンに代替せしめ、アキヤブ、バセインを副港として、こゝに堅固な防備陣地を施し、日本軍をくひ止めようといふ作戦を樹て、一方において蹙る重慶軍をおだてて泰國に侵入させ、日本軍を牽制させようとした。これに對して重慶側は英蔣軍事連絡部を設置して、イギリスの機械化部隊を重慶軍に配屬せしめ、兵站運輸點をラシオに設け、裝備の補充を強化すべきだと頑強に主張した。このため陳誠はラシオ方面に、張發奎はラングーンに派遣されてイギリス側と折衝する一方、蔣介石も本年一月末陳、張らと會見し、この問題に關していろいろと協議したのであつた。

蔣、インドを訪問

蔣介石は米、英の對蔣援助に對して不滿を抱きながらも、對日抗戰は

あくまで不可能とは思はず、窮極における米、英の勝利を盲信してゐるので、對米英依存の惡夢をなほ捨て得ず、ビルマ・ルートを喪つて悶々の情やる方なく、何とか血路を開きたい一心から、蔣介石自身、突如として二月上旬インド訪問の旅に上つたのである。この當時はビルマの危機は迫りながらも、まだビルマ防衛に關しては彼らが畫策する一應の餘地は残されてゐたし、表面上、蔣の訪印目的の主なる議題はそのことでもあつた。しかし眞の肚はビルマ・ルートの潰滅によつて抗戰のエネルギーを注入する輸血路は重慶とカルカッタを結ぶインド・ルートのみとなつた關係から、この問題に關しての協議が中心であつた。前者については、印滯をも英蔣共同作戰陣營に引込まうとしたのであるが、印度としては、自由のために戰ふためには、戰ふための自由を得ることが先決問題であるといふ態度を持してゐる點から見て、印度を對日戰爭に起させるためには蔣印關係によつては、いかんともなし得ず、一にかゝつて英印關係にあることを明かにした。後者のインド・ルートに關しては重慶も昨年來眞剣に考慮してゐたし、米・英側でも重慶政權を反樞軸陣營より脱落させないために、このインド・ルートの建設を誇大に宣傳してゐるが、

このルートの実現はまづ望み薄と見做さざるを得ない。

彼らの謂ふインド・ルートとは諸説紛々としてゐるが、大體重慶から康定、理化、巴塘を経て印度北部のサジャでベンガル・アッサム鐵道につながる計畫とみられる。この長さは實に三千五百キロといはれ、ビルマ・ルートの二千六百キロよりはるかに長い。サジャからの鐵道はカルカッタとチタゴンに出るが、チタゴンは距離は近いが、軍需品輸送には港灣設備が不十分で、どうしてもカルカッタを利用せねばならぬのである。ヒマラヤを越す輸送路の困難さはビルマ・ルートの比ではなく、その最高地點は海拔九千呎、ビルマ・ルートの最高地點より三千呎も高いといはれる。これは机上の計畫通り進捗しても三ヶ年の日子を要する。

いづれにせよ、蔣の訪印は何ら効果の見るべきものなくて終つたのであるが、重慶政權ではビルマ・ルートに代る印度・重慶間の物資輸送問題が決定したと稱して、今後はビルマ・ルートを廢止すると捨て鉢的な左の如き聲明を發表した。

直接印度より重慶に物資を輸送する具體的方法が決定された。この方法による輸送能力は從

來のビルマ・ルートによるものを凌駕するので、今後ラングーン・重慶間物資輸送のルートは、これを廢止することとし、ビルマ・ルートの附近には地雷を敷設した。

ビルマ・ルート壊滅

大東亞戦争における雄渾無比なるわが作戦は、開戦三ヶ月にして

米、英、蘭が誇つた對日包圍鐵環を成すあらゆる基地を完全にわがものとなし、その一翼をなすビルマ作戦も開始以來本年一月十九日にタヴォイ、同三十一日にモールメインを攻略、二月十日にはマルタバンを占領してサルウィン河の渡河に成功し引きつゞき十九日にはビリンを占領、シツタン河の左岸から攻め入つたわが軍はこゝに首都ラングーンを葬つたのである。古來ラングーンは『戦勝の町』といはれてゐた如く、ラングーンを制することはビルマを制することになつてゐたのである。この場合もまたさうで過去半世紀に互つて搾取と彈壓をつゞけたイギリス勢力を根柢から覆滅し、獨立を求めてやまぬビルマ人のビルマとしての民族解放運動に大きな拍車をかけ、これによつて支那事變解決の鍵を握ることとなつた。

皇軍のラングーン攻略によつて、重慶政權の抗戦力を培養して來たビルマ・ルートは文字通り

こゝに壊滅し、再開以來一年五ヶ月にしてその激性に終止符を打つたのである。重慶が最近に至つてビルマ・ルートの廢止を唱へ、インド・ルートの價値を宣傳してみても、過去において重慶への唯一の輸血路として抗戦力を培養したのはこのルート以外になかつたことを想ひ起せば哀れむべき末路である。スウェーデンの世界探検家スヴェン・ヘーデン氏は、ラングーン陥落後の對重慶輸送路について左の如く語つてゐる。

目下論ぜられてゐるビルマ・ルートに代る計畫、すなはち援蔣インド・ルートの建設は全く非實際的といふのほかはない。なぜならばその間には大變な山があつて自然的障礙物を形成してをり、土木技師の手におへない。また氣候も悪くて道路建設には不適當である。したがつてラングーン陥落後にはビルマ・ルートに代るべき他の道は一つも見當らない。

ビルマ・ルートの壊滅は單に物資輸入路を喪失したといふにとどまらず、シンガポールの陥落と相まつて、ビルマ・ルート防衛に重點を置いた重慶の米英との連衡作戰を全く不可能ならしめた。重慶は完全に米英の反樞軸陣營から孤立を餘儀なくされ、米英の對蔣援助などは過去の夢と

化し去つたのである。

さきにシンガポールの陥落によつて對日抗戰資金のドル箱たる南洋華僑を失ひ、いままたビルマ・ルート壊滅によつて米英と完全に隔絶した重慶政權を見舞ふものは、和建國か、抗戰自滅かといふ六年越しの宿題である。これに對して蔣介石は最後の肚を決めねばならぬドタン場に追込まれたのだが、すでに對日單獨和平論が從來に比すべくもない切實な問題として重慶部内を苦しめてゐる現状を、彼は果してどう見るか。

戦ひはなほ續けられてゐるのである。われ／＼も緊禪一番、なほ事態の推移を注視せねばならぬ義務を有する。(終)

924
=

昭和十七年五月十二日印刷
昭和十七年五月十七日發行

『ビルマ』
定價二十錢

出版協承認六〇〇八

不許複製

編輯兼發行者

櫻木俊晃

印刷所

株式會社 朝日新聞社

發行所

株式會社 朝日新聞社

配給元

日本出版配給株式會社

東京市神田區淡路町二丁目九番地

日本出版文化協會會員番號一〇一五〇三

東京市麹町區有樂町二丁目三番地

株式會社 朝日新聞社

東京市麹町區有樂町二丁目三番地

株式會社 朝日新聞社

昭和十七年五月十二日印刷

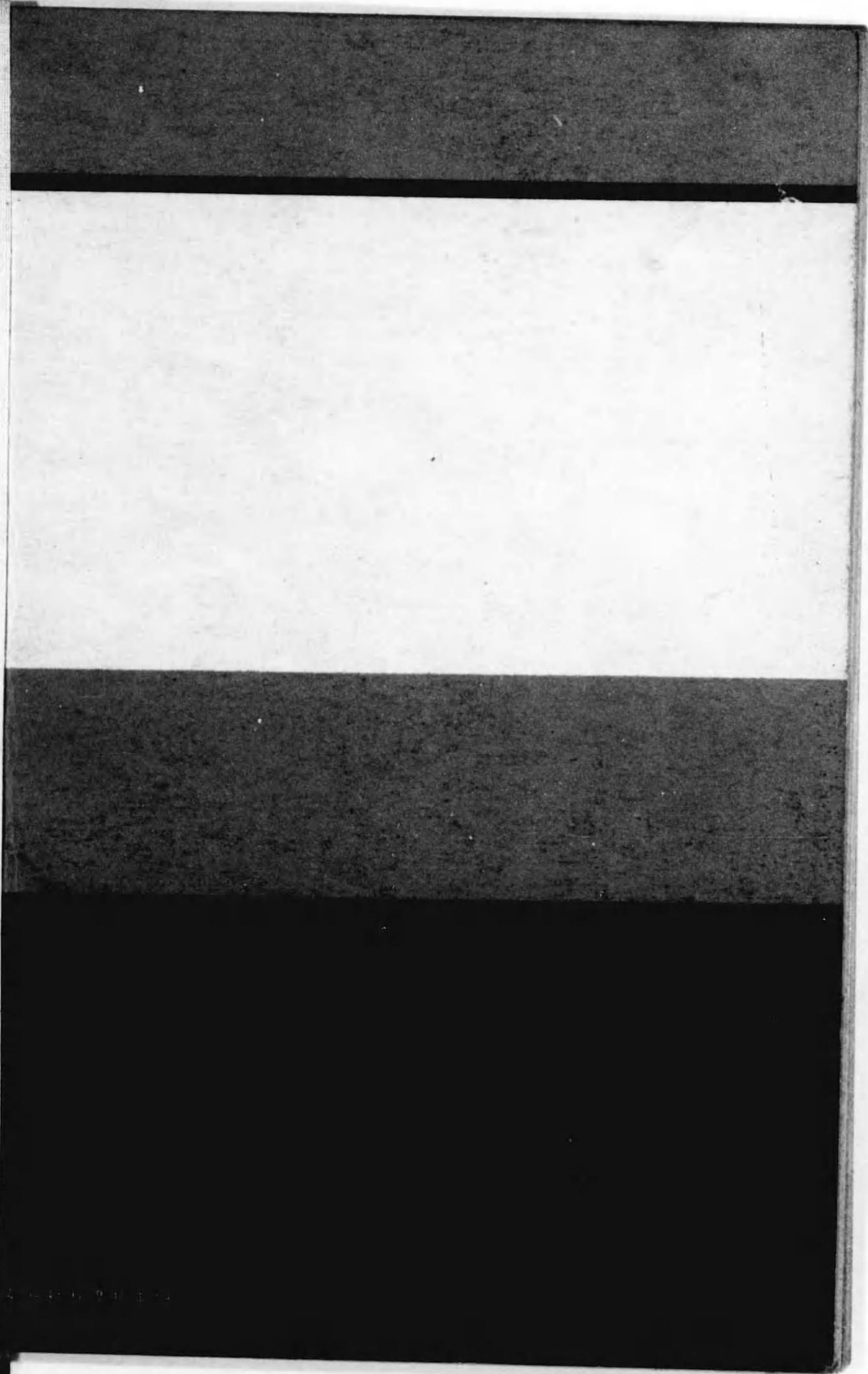
『ムルマ』

製本控

日	月	年	號	函
			250	917
冊	1		2	2

備考

29238
A82



終

